

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ 163

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで見聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

コクサッキーA6による eosinophilic cellulitis

第81回日本皮膚科学会東京支部総会から(平成29年11月18日)

40歳代の男性。熱発と同時に両手・両足の紅斑と腫脹が生じた。両腋窩や腹部などにも滲出性の紅斑があり、手掌には小水疱を伴う。病理組織学的には真皮中層から皮下脂肪織に多数の好酸球を含む細胞浸潤と flame figure を認めた。末梢血好酸球は $14,900/\mu\text{l}$ まで上昇。コクサッキーA6の中和抗体が8倍から128倍に上昇した。「感染症がきっかけになることはありそうだが、手掌の小水疱がなければコクサッキーの中和抗体までは調べないだろう。ほかに誘因があるかもしれないが、貴重な報告だった。念頭に置いておこう」。

好酸球増多を伴う 若年者の側頭動脈炎

第81回日本皮膚科学会東京支部総会から(平成29年11月18日)

20歳代後半の男性。喫煙を再開して数カ月後から、右こめかみに索状硬結が出現した。頭痛や視力障害はなく、血沈も正常。通常の側頭動脈炎は55歳以上の女性に多く、頭痛、噛むときの痛み、眼症状、さらに関節痛や筋肉痛などの全身症状を伴うが、若年者に発症するこれと近縁の疾患があり、若年性側頭動脈炎と呼ばれる。全身症状を

伴わないことがほとんどで、病理組織学的に血管壁に好酸球の浸潤が多いことが特徴である。誘因としては喫煙やなんらかのウイルス感染症が考えられている。

「側頭動脈炎は、高安病とともに巨細胞性動脈炎という病名に変わったはず。高安病は若年女性に多い疾患だから、若年性巨細胞性動脈炎は、高安病のことを指す病名になってしまいそうだ。最近の血管炎の病名変更は、本当に困った問題だ」。

fibroblastic rheumatism とは？

第81回日本皮膚科学会東京支部総会から(平成29年11月18日)

60歳代の男性。手指に比較的急速に浮腫が生じ、関節の曲げにくさを自覚。股関節・膝関節の痛みを伴った。手指関節背面に母指頭大までの皮下結節が多発。皮膚生検では真皮の膠原線維の増生と弾性線維の減少を認めた。手関節のMRIでは滑膜炎の所見あり。fibroblastic rheumatism と診断した。皮膚の線維芽細胞が関節の線維芽細胞と同様に、炎症によって活動性を増すことが原因で、治療にはプレドニン、メトトレキサート、インフリキシマブなどが用いられている。

「1980年ごろから提唱されていた疾患のようだが、初めて聞いた。いまだに診断したことはないが、遭遇していたのかもしれない。急に発症する多関節炎と手指の皮下結

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

節とその病理組織が診断のポイントのようだ。覚えておこう」。

エクオールによる薬疹は エストラジオールが原因？

第81回日本皮膚科学会東京支部総会から (平成29年11月18日)

50歳代の女性。子宮筋腫の術後から、顔のほてりや多汗が生じ、婦人科でル・エストロジェルを処方され、外用部位に接触皮膚炎が生じた。パッチテストでは主剤のエストラジオールが陽性。その後、婦人科から紹介されたエクオール(大豆イソフラボン)を内服したところ、播種状紅斑丘疹型の薬疹を生じた。エクオールはエストロゲンと類似の構造を有しており、経皮感作によってアレルギーが生じ、交叉反応によって薬疹が生じた可能性がある。

「大豆食品中のイソフラボンであるダイゼインは腸内細菌によってエストロゲンと類似したエクオールに代謝される。エクオールは一般的なフラボノイドと同様に抗酸化活性を有し、さらに化学構造がエストロゲンと類似していて弱い女性ホルモン様作用を持つと考えられている。美容や更年期障害に有効との報告があり話題の食品だが、こんな副作用もあるということを認識した」。

不育症を伴った網状皮斑 ～抗第XII因子抗体が原因だった

第81回日本皮膚科学会東京支部総会から (平成29年11月18日)

30歳代女性。3回の流産の既往がある。1年前から両下腿から足背にかけて網状皮斑を生じた。抗リン脂質抗体は陰性。クリオグロブリンも陰性。病理組織では真皮中層の細動脈にフィブリン血栓を認め、livedo racemosaと診断。不育症の原因精査で第XII因子活性の低下があり抗第XII因子抗体が陽性であった。アスピリンの内服で挙児を得ることができた。

「第XII因子欠乏症は通常出血傾向はなく、静脈血栓症、肺塞栓症などの血栓症状をきたすことが知られている。女性患者では不育症の原因となる。系統的に血栓が生じる疾患の原因として重要である。また、不育症の新しいリスクとして抗phosphatidylethanolamine (PE) 抗体と抗第XII因子抗体があり、血栓が生じやすいことのほかに胎盤の形成が阻害されることが原因とのこと」。

